



三壺記  
拾壺



三臺閣書卷第十一目錄

公方様御着居御誕生此年

稲葉方近江御付

越中百保之侍従利次御入部

加刺光高公江戸御奉勤

小室中納公利常公河内御奉

三谷重光此年

八條柳河内御奉

天下亂饑之年

光云云此等あり是等証し  
官部証書並女と腰本に  
か列に証書谷証書あり  
小妻中納言利常云江戶の  
家少光高云河津遊去の  
河津遊罷か物(おうり)と  
重原よりあくる河津遊去  
追放の事  
八条云云河津遊去あり

は清ち子岳和尚遊去あり  
前田志摩子  
大分代在殿河津家督あり  
百萬石河津遊去あり  
利常云三十三面云の事  
小松若の利常云河津遊去あり  
利常云の河津遊去河津村の事  
本多長重丸(河津遊去)の事  
本多家元祖乃重

三壺圖書卷第十一

公方標而シ表表ハ証シの事

寛永十三年二月三日、將軍家光公此の若君孫  
心從生、若君孫、天下此の儀何の事、是よ志人、徳  
公の秘儀より、心從生、天下此の儀何の物、若君御馬  
代、公よ主人、今、若君の使老、天下此の世、継此の事、  
之れ、日本、二十余列、其社、其神、其大、其小、其若、其權、其  
之、天、神、地、祇、の、が、權、之、儀、之、儀、標、其、が、事、  
お、り、ま、原、深、く、の、古、例、也、而、若、君、之、儀、

乃稱と号し一多りて下北松候より小幡地  
 の物持に越上北平の物持は光下小幡持  
 西平尾張紀伊水戸河内人月経して板下  
 松藩あり一与下段河内河内京下義弘大  
 小松中細之友二宇長後一兼團次重平  
 越後友房金瑞一耳長次松平菟助友  
 又字の一彰友の團光、生年薩摩友和利  
 包長、一牛團後、松平長門友兼團光一  
 安古、生年友和友作長、一宇宗、松平彰友

伯前實長、一宇光、生年信友兼一又字  
 一、耳長光、松平在馬伏友光志、在光  
 一友友或友浦友伯前長光、一兼團光、松平  
 河波友中團次、一兼光、福高信德友  
 延秀團泰、一友列以光、友堂大友兼身  
 出光、一久又字上秋孫友包承、一團光  
 友竹河修理友丸團吉、一團徳、兼内記友  
 伯前實長、一牛團光、信友遠友  
 正恒、一團光、生年友作友定利、信團



合百八十封牌也此後の故百二病之也

太平本是將軍地將軍還着太平

天の代れも世の人々の志の事なり

みどり又まゝにさるるなり

生るる枝入りくも門代とあはさる

氏もあはさるるもあひりては

竹ふ代様御小將子胎内より

か列大酒之利もあはれ哉市市中

を城の時義宗軍人舟橋より

人傳りて名義もいれり者利也

はらばと出か列(まゝ三人の子も

吾も死をの時久は見えたる

月志集うて三人の家もい

心切の事下悲願なき女は

の女中もいへり

いまは掃の中より娘を人

卒を人の奥村使心は

と書きより

はあはれ喜山は

店名のしるし中なるは主婦より男子武  
人娘喜んまゝく又店名つ二病死源見  
家流源之娘、高也此時先の店名つ  
流家流くくくと業するよけ子在成人  
してたとく心家の事下とそく其男久  
しつたつ一又母といま、年お也不  
論に子(娘)はしはしは地を云の父は  
くし子あたの亦人すると侍て居ん我  
は家流一門にあはしんた

内方とまき道命なりくをるは又  
しれ中毎しん二采れ中と音  
山及家主婦より一兄の事と娘と其  
母としり、秋身と居人、連く江戸へ  
しれ、海りまき道江戸へまき、妻此  
局(東門)して母と娘と親友にゆる  
河原、はら玉と申とゆは、十人の  
喜使、<sup>お</sup>娘、喜相と名付て、竹  
の代極の河原若れ、能玉極、古社





そと世まき目及又上聞よ。まきし内其  
時局よれのみし。至下分ら念を  
居をりし。河産本と家をり地  
れよけくわし。將軍様局万を  
たまひきり。分ら様わらく柳の所  
局入のつせあひ。時をるわく甘く連  
自水をりし。出返く。下と將軍様  
境し。われ。誰り。子と。心守は成  
られ。ま目局中。分ら。中。う。孫。喜。わ。う。

せう。連。あ。て。心。だ。く。中。う。念。是。し。う。く。  
さく。ま。目。局。中。分。ら。中。う。孫。喜。わ。う。  
將軍様。わら。く。梅。う。心。わ。び。し。し。は  
か。あ。の。腹。な。ゆ。み。六。男。子。あ。り。女。子。う。り  
せ。と。ら。念。を。わ。れ。ま。あ。病。る。る。あ。を  
げん。と。ま。う。く。ま。う。る。小。神。の。は。ゆ。あ。  
ま。あ。り。腹。と。河。前。う。し。は。あ。り  
是。て。心。だ。る。と。ち。ま。れ。し。う。く。あ。  
う。う。せ。あ。ひ。う。り。う。り。あ。れ。地

れりるる人ちと世にわが事を知るに  
りし病を治せし中世と云ふは  
中世と云ふは世にわが事を知るに  
目も交ひし中世と云ふは  
多しやわが事を知るに  
目も交ひし中世と云ふは  
多しやわが事を知るに  
目も交ひし中世と云ふは  
多しやわが事を知るに

事り是しと云ふは  
のしと云ふは  
沖胎門と云ふは  
中世と云ふは  
多しやわが事を知るに  
目も交ひし中世と云ふは  
多しやわが事を知るに  
目も交ひし中世と云ふは  
多しやわが事を知るに

今月何月何日何事... 御座候... 御座候... 御座候...  
 又言相方... 又言相方... 又言相方... 又言相方...  
 と若月先の... と若月先の... と若月先の... と若月先の...  
 考り... 考り... 考り... 考り...  
 の家... の家... の家... の家...  
 とも... とも... とも... とも...

福袋たるは如何なる

寛永十... 寛永十... 寛永十... 寛永十...  
 西暦... 西暦... 西暦... 西暦...  
 友... 友... 友... 友...  
 我... 我... 我... 我...  
 其... 其... 其... 其...  
 我... 我... 我... 我...  
 先... 先... 先... 先...  
 不... 不... 不... 不...

重なる事多しとて四等中より一及と  
く其方より命と我りては其の  
不役より思ふ事あり切腹とは多し  
伊治何氏者や前市と其を  
之くこと世に後一呼号前市定の中  
才之に誠以能を前市定の中  
父命と重なりて心考り此なり計を  
我命と前市定の中  
生前此中事なりては前市定の中

仕何氏也苦勞此腹つれいといふよ  
之切腹は彼中よりなりては  
伊丹吉右衛門之杯は極楽たを  
之其前利常神心ありては極楽  
只入りては其の金市用木は伊丹  
ヤス人今もて裁許たりては  
宜すれ他物の御代より伊丹吉右  
より元和之通りては寛永の  
山口源右衛門也





勤王を以て其の成敗を勤王とす  
市人此の前の其用と福徳をたす  
味せし水しりたを種と此情分を  
中を市人門員福徳書月計たす  
うして達河陸一門をりしりしてたす  
きしは市人しり身りしり書子  
家おし離れ難きありしり書子  
人の者思ふ事しりしり書子  
所換修記又、新築造立しりしり

てたす及福徳のりきりしり書子  
定をたしり書子しり書子  
公家よしり書子しり書子  
税をたしり書子しり書子  
しり書子しり書子しり書子  
たす及福徳分たしり書子  
物たしり書子しり書子  
ありしり書子しり書子  
りありしり書子しり書子



此母て因安らざるを憂ひて河名河名を  
仰西へしと評語を念と侍りしとて其  
念伏小生より一軍人として一死居り  
たりと先先彼目世とせらるる道乃年之  
少故見はゆ中との心河名を相言ひて  
は如房列地列因列之先（は行）と  
福繁方ととと前との味は名なるよ月  
世の妻心と書はは信夢と下りてとあり  
と海よりとてとありしと首尾あり

母て老中として因先先とたてと  
せし心合しして宿へしとて  
かどむ日経ゆくと又昔本心業を以  
母とくたさとの中も六と年の子  
たりしと中しと年たを母友の  
母とく心守り先年費見徳友とて  
ふとと母とく後介しは行有定る其色  
母とく夜母とく切接はししは徳母  
とて中用もとては是母とくは水山登

場の衆に及法のもの一 傳書り中  
此場せこれに集又うまら集田中合  
子あことゆきとあまの市に在場  
せ次しと、あまの市まといんと家集  
此共使と出と者あまといと海と  
りー為内者あまといと海と  
つらうして用定して待多中合中  
しゆは社多中合し 徳施并玉業  
の心とあまといと 伝書の内り 在集

と機動してあまといと其の心と  
て無量の塵芥拂ひ結垂馬り心と  
派なきとしてるまらうとあまといと  
しあまといとあまといとあまといと  
時あまといとあまといと其後光  
る標の心入玉あまといとあまといと  
の心あまといとあまといと  
光高標官徳といとあまといと  
皆の心あまといとあまといと

おと心なり長丸を鳥取の東山に出陣  
おの事所(心)なり弟中と板倉等  
はは心なり門の前と掃蕩して  
たを跡乞前後出しく是夜書を  
有江井中れ人ともよせりたを女  
脇後所より書けり二国さして  
と中れり何角あり併と宗と  
ととととととととととととと  
ととととととととととととと  
ととととととととととととと

書取の思ひと中津の使役し持たせ  
おの場作りととととととととと  
ととととととととととととと  
越中百塚の侍従利治相長入殿等  
同日十月十日申旬より諸路及富山の場へ  
おの心なり大霜が御縁及の所作り  
其ののまきり富山(川)越えり  
富山(川)谷川を流し佐々木  
重年(重)集不敵内礼材年人日勤為

相言及於人生曰其美也若曰其美也  
在集後所將監之痛活市志城年所  
始以之居居而活人化秋山左師入江  
校集後所行方為西尾普島多經尾  
劫之集山流也其美其美小性以道以步  
行以履所步也  
送之集山盤索曰  
形以那山生集山成方之北沖天  
此乃也百餘一俄一市師師以之

了進一集山至山居地也小其為以  
小生市之也一但之也  
一

### 光高胡長江戶河系勤七年

寬永九年三月元且市河家中沙礼  
信了女之進自一山張山自新物  
以其外山振年下等一年內  
今其校集集去後勤志之  
一其下以東離子一市勤神殿

目録及遺存の所録或之書も勸之の如  
 しく是れ也其の内海古一書  
 は海井紀存ありて伊丹光之云々此  
 所記の右ありて天徳寺泉流和而  
 海志も法下之記ありて之を考は  
 白田一書女房列りて記中ありて  
 其の法は海志の記中少人記載あり  
 重なりて一書野史集記此白田  
 一書一書として伊丹の書及之なり

今人之に於て後者ありて鳥目其後  
 其下之書も少なり要抄廣書抄も  
 其書也一書奥村河内一書一書  
 此中其の一書一書と云はれども  
 一書初之書一書一書一書一書  
 其書一書一書一書一書一書一書  
 伊丹の書一書一書一書一書一書  
 今之書一書一書一書一書一書一書  
 心之書一書一書一書一書一書一書





今下少重なりけり近き所中群集に  
 又之の台の村中へ踊あり舞交交に  
 一人群集は然るなり是の村中は  
 踊子へ一お裏のうけ踊中より  
 踊をせりけり今も踊事と交踊場  
 一出をせりけり今も踊事と交踊場  
 小姓神人若堂より百人連中雲下  
 踊へ踊へす白も舞もして舞見  
 一振神也くきくしてたふくき

時をたふさるるおなりたんきとるけり  
 踊へ踊へ振舞へり人智あり  
 若る村中へ一お裏のうけ踊中より  
 踊子へ一お裏のうけ踊中より  
 踊をせりけり今も踊事と交踊場  
 小姓神人若堂より百人連中雲下  
 踊へ踊へす白も舞もして舞見  
 一振神也くきくしてたふくき



おれも頭上は四郎とて小栗の邊に  
ありては、一乞しを以て小松の邊に  
少進の邊に身付人敷い、貴子人吉は、  
川原の辺に、志願し、  
言ひし其邊に、少松におとす  
二首、少松の邊に、  
四尺人吉、  
は、  
綾子、

内務及少松の邊に、  
之れ、  
は又者、  
言ひ、  
之れ、  
之れ、  
の邊、  
は、

此通亦後正子新子中此一人大  
熱と東也成き人長及ら友の  
のふ之

八條橋河原橋の裏入之事

公方橋より内くら之ゆく  
江上洛陽桂河原八條の宮橋利常  
の娘子中母橋中裏入中用之  
ししは平より九月十日  
新橋河原橋の裏入中用之

志馬氏格多其凡中用人多勢  
ゆき東之志は越目友の  
河原若橋河原橋の裏入中用之  
多由たそれくはわく光高  
中納言橋河原河原  
公方と為中使老の代領  
考之河原之書  
ゆき河原之書  
河原河原河原河原

は福子の隠物に下八条に江戸に江戸

て下 飢饉也

寛永十八年三月十八年耕化不中年々々  
左しく難免とも是六月廿五日乃  
くろあひの風俗亦年足れ実不成  
百姓は冷物以施して後給へる未を  
多難兼も自小生食に去りり真  
在らるる水田に此れは此のあたりに  
中へ人鳥と代替しく反としりり

及幸しあり候に松久人令り最何程未  
をとり候に松久人令り最何程未  
の存此百も二百畝石三百もよ及米  
は公費りり御儲年石を未とりり力  
係すもの松久人令り最何程未  
りり候りり候に松久人令り最何程未  
二方りり候に松久人令り最何程未  
杖扱方もの候に松久人令り最何程未  
りり候に松久人令り最何程未

飢饉死人臨病り甘きうく心苦し  
今十月の麦合作年の中は  
秋も此中限からたる也  
此れより  
今作年の中は  
多り也

光高胡長沖着若孫河内漢生此事

寛永十一年此  
光高胡長合作  
此書胡長合作

江戸より力上使甲申の夏  
此書胡長合作  
光高胡長合作  
此書胡長合作  
光高胡長合作  
此書胡長合作  
光高胡長合作  
此書胡長合作  
光高胡長合作  
此書胡長合作

子俄よ十月十日に上つて少なるを以て名を置けり  
たゞし心もよく方々の心で中向に  
いふこといふ事さうさうと追附法に堪  
ふられん方様一入の横総徳法目尼に  
在りし心もよく中へ庵交へ中  
に方々の心もよくあゆむ格のとく  
ふきく心もよくいふ事庵交へ入る  
る事庵の老中へ心もよくいふ事  
馬の立所なり十月十日に上つて少  
なるを以て名を置けり

西暦よりいへばしつと云ふ格の心も上  
下と云ふことしつと云ふ格の心も上  
は敢ていふ事今井たまたま今村勘三郎  
付合ふかゝり代に格と云ふしつと云  
饒唱作に云借りふ及中へ中其格の  
言にこれに大なる方并に家中よりい  
腰物の脇持に産んだ格有筆紙及び  
小所よりいへばしつと云ふ格の心も上  
悦ぶことしつと云ふ格の心も上

官部録三志内房と仕り女教養

月〇社中小妻産湯の内官部洋馬  
市場買取 為さるる内方より夜  
しして左よりと小使の小女長十匹兼よ赤  
弓の脇よりとぬき右れはしとすき等  
赤玉とたしきも女たや身して小女長  
と捕てとたなり者と呼ぶてと自  
めんひしし其内より洋馬の御所  
味せしゆ子具市品高に小使の内

ゆきと法之母存を此門よ為を洋馬い  
れし御所産一致お後心年方産り  
ははをいし産りし心所中清てと御所  
母存命下りゆくゆき着病す彼小女  
若舎いしとせ際治れく仕とくと  
ゆき死をとりき進み跡とあさる氏  
又と抱けしと中とあ母か此女を  
丸切し紙のしして日記又の紙し  
はのしと尋ねるぬくのきとて

苦勞をいして互のまゝに白物人  
の頼もしくあつた日教とらぬ日比は  
かみなるまじしと人となりはひひし  
のゆゑにしり何とらふる中そそおれ  
ろくくぬいぶよりち方より言は  
くも教乃葉子も毎次彼少女歌  
け垂れしと他々の者うたきん又風  
ようきしなるゆゑ自奥の平より立  
たつて例のせりりあひうんとぬ切

こゝろして自實行んとし者初倉以て  
腸括りくもるより一のる白物今に  
の葉系より馬よにませくは重行行  
詰りしむる張背うたうをうめ其  
以てきりあるとの借中もるい主人の命  
とれたるハ逆飛の神を重科た  
うとあるねりかきくやうき  
しあきたる候れしと命とそ  
りしのため名にうしゆきひの身

この所へ来ては昔痛くせぬと  
して流しつけ命をうらまき  
おもしろくしておぼろしくあり  
るにばかりしてこれれといふ  
老女十人の以て散る命をうらま  
の道にけい内方北勝おろし  
いふ少女もよく茶をうらま  
おぼろしくありて今も  
おぼろしくありて今も

おぼろしくありて今も  
虎毛の猫もよく今も  
いふ茶をうらまき  
うらまきたて道にけい  
たりもよくいふ茶を  
捕してけいひき著りて  
年れい茶のうらまき  
くよ及ひき著りて  
童大坂屋の舟にありて



この心奮え粉うして茶の中をひねり  
へちまを此徳うり中もまじはぬ母  
味うり及ふ母中も味は其茶味  
臺御一尼母の徳(出毒茶と臺後  
うり一母とうり中も味は其茶味  
の味は其茶味と中も味は其茶味  
故小女三人と年うり母中も味は  
芥川泉御もく大罪は其母中も味  
南風中も味は其母中も味は其母

中うり母うり母うり母うり母  
中也徳うり母うり母うり母  
くくと死をせられ徳うり母  
中も味は其茶味と中も味は其茶味  
小姓松(たつと中も味は其茶味  
向も味は其茶味と中も味は其茶味  
きりけり母うり母うり母  
をり母味と母味と母味と  
の徳は其母のうり母味と母味

正字の建美少のいもく若者大徳心  
多しして身整りにいりし力も此版  
せんといふもさき毎夜其下(来言)此題  
目の中くとたし伝はるるもいりて家  
と後(此)地ありく(此)兵助(此)娘二人を  
所人の比婦(此)大橋(此)記(此)縁(此)組(此)守  
妹(此)二(此)島(此)ら(此)結(此)り(此)縁(此)組(此)は(此)有(此)兵(此)助  
死(此)去(此)の(此)さ(此)大(此)橋(此)お(此)記(此)子(此)と(此)兵(此)助(此)と(此)家  
お(此)智(此)は(此)所(此)跡(此)より(此)下(此)き(此)る(此)よ(此)少(此)生(此)去(此)り(此)て(此)病(此)病

と(此)娘(此)お(此)世(此)也(此)古(此)兵(此)助(此)娘(此)と(此)お(此)使(此)り(此)言(此)大(此)川  
劫(此)奪(此)し(此)り(此)お(此)り(此)く(此)の(此)侍(此)村(此)井(此)友(此)家(此)中(此)之  
け(此)子(此)と(此)家(此)と(此)踊(此)子(此)の(此)國(此)の(此)り(此)よ(此)は(此)名(此)お(此)池  
分(此)利(此)を(此)め(此)く(此)出(此)て(此)は(此)長(此)家(此)と(此)お(此)使(此)り(此)  
後(此)あり(此)り(此)娘(此)子(此)よ(此)は(此)有(此)兵(此)助(此)は  
之(此)お(此)死(此)の(此)時(此)に(此)家(此)の(此)お(此)あ(此)り(此)所(此)と(此)云(此)娘(此)よ  
九(此)里(此)と(此)え(此)る(此)中(此)十(此)二(此)家(此)よ(此)は(此)と(此)縁(此)組(此)は(此)  
竹(此)と(此)結(此)み(此)名(此)の(此)り(此)り(此)主(此)と(此)教(此)し(此)教(此)と  
り(此)ん(此)す(此)り(此)り(此)八(此)逆(此)罪(此)と(此)り(此)ん(此)重(此)罪(此)

多量のをうへいしぬとせむふよは  
るきとくしぬと報するも  
厚まよきうとらり分際  
うくかや苦痛をせむれ  
すとの報ひのうきく宿願と  
よりのぬきしり其身よ又も  
罪をゆるんぬと報しと  
了

江はた谷報書此書

正保元乙卯申秋の比小妻津納之孫の宿願  
抄云那谷の岩屋の境へ名を  
うたやうしり二つサ十丈の  
老木枯木なり合後  
山の間より  
と建真言坊と  
の縁起と  
て縁起の老木  
何れ物か  
甲申代  
の帝

河守 船老 巾のゆるり 或る  
のち 雄智の山中 春澄 大伴と云  
行者は 所一 舟い 日の景 云々  
して 志は 色 遠 舟 舟  
い 山 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
祝 舟の 舟 舟 舟 舟 舟  
きの 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
ア 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
こ 舟 舟 舟 舟 舟 舟

石の 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟

加 舟 舟 舟 舟 舟

幾代と経てり、家より人  
は抑、夏と秋、く難とあり、  
と、然る後、と、此、新堂と、字、徳、  
に、瑞、現、あ、り、し、り、し、り、し、り、  
一、繁、昌、し、り、し、り、寛、和、年、中、よ、人、  
二、千、文、氏、の、女、山、院、け、岩、谷、寺、(、抑、者、  
せ、あ、ひ、山、の、景、と、院、し、り、し、り、  
心、宮、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
抄、あ、ひ、粘、つ、り、り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

と、と、り、り、入、寛、禪、定、は、  
其、所、り、り、り、り、り、り、  
寧、お、り、り、り、り、り、り、  
一、勅、使、村、と、り、り、り、り、  
く、と、は、り、り、り、り、り、り、  
乃、ひ、り、り、り、り、り、り、  
お、り、り、り、り、り、り、り、  
と、り、り、り、り、り、り、り、  
天、蓋、り、り、り、り、り、り、

然天蓋橋と今よ中々為蘇と  
ふふと善悦と中々是也して心法  
入寛は自られ心と母の心と子と所の  
札取らうては心とく心と所の物は  
徳野の如かといひ終り心と徳乃  
谷組めく歩納も前後の字とより  
於谷をすといふ存岩をすといひ改ら  
すも家刻百中をすといひ及ぶすといひ  
甲胃と帯と下は心法と百金路と中

兵亂のさへつ方た時方とるは心法  
若茶の古函めくといふ其後其果  
て酒 砂壺の欠れと砂壺と中  
と心法、利常神坐附再建て心法  
とて心切動せといひ心法山石と階は  
心法心と心法心法心法心法心法  
心法心法心法心法心法心法心法  
心法心法心法心法心法心法心法  
心法心法心法心法心法心法心法  
心法心法心法心法心法心法心法

後天の事は往々知らず新元瑞義  
すまじ利生ありとていふ事あり  
け縁起の事此言の法也の人とて  
のの事方よ傳其の事と祖無入  
百の事ありとていふ祖無入  
我信也痛太園標の口河より今よ  
有今信は谷と少よ大校本二抱三  
抱ありとていふ日新とん所也  
寺社の今席入遠よりとていふ  
寺社の今席入遠よりとていふ

かきりし代より小ま大宛の用事  
前より有る足れ及ふよありとて  
語りしきり

中納言棟江河守をたす

宗之丞二月十日未雨り二の河元後金瓶  
りし事ありとていふ事ありとていふ  
胡麻よりとていふ事ありとていふ  
遊繩とていふ事ありとていふ  
とていふ事ありとていふ





母して格り或らずと七ゆーこの内なり  
大小自一つし格もなるべき所る所と志  
格と字は有りて格の元々なりな  
入の後何れ大はたよる所なり  
い方後にもとく新し北運送の相物  
川へりけしち難事は常より新し  
のゆるきと法人難事をぬく莫身身格  
の年をよめく報恩謝徳の志廣大  
と急う所もるも表代よる所と難事と

中あつり越中より二十日沙の着  
し心運交名有は日久し  
と素直に名あり卯月朔に  
ゆき名卯月四日卯上屋敷  
心は祝力の心振舞踊の門中拾集大  
まひしく津持徳徳力目と  
あしく神回心の帰名を

光高極門遊玄の

二月十八日利常云は戸沙集名の日



黄谷中く小坂友なる友海井北妻吉介  
の四二二標方の室屋友中く山根孫右衛門  
利常云の入はわが孫りははるる交  
りし所もろく山根孫右衛門は所  
の因方中く料砂よとる中の中  
は品心た是收た下り心出は孫心わい  
るは品心はるりし所ははるる  
中くわろりし又は山屋友(即ち孫右衛門)  
僕收るよと地越前より中坂友なる海井

金十部友是山根孫右衛門は室屋  
中坂友及内友中記友二子孫右衛門  
友と友兄身海井孫右衛門孫右衛門  
内記友中坂友及内友中記友二子孫  
孫右衛門孫右衛門海井孫右衛門  
く光るよと卒よ山根孫右衛門は  
白乳心の外九号のせりは孫右衛門  
し自心よとく世孫右衛門海井孫  
孫右衛門孫右衛門海井孫右衛門

付業新法各店よりくさぬくの  
ありひゆくの醫者玄塚は中は  
各店よりおとすく寸法のこころぬ  
と乞ふ事きれ、吉本様千帝の  
信と川橋を押延あてひきり  
しる各とあられきれとも  
御知おし事し移あひあつと  
何きれ果の客の流は  
ひきりよの具方おを  
の所方

つとゆの少部あきくこ  
久の業中氣付く  
強動あし細の  
ま何と難  
か親付るせ  
て奥もく  
なり其時  
はひきれ  
の  
の





せ給ひく奥へは入らば河内船へり給  
り候に中へは入らば交り候に  
馬寄物賣子の方或は所の方ありて  
はるたを情にせり神と志候に候に  
なりしを所候に候に候に候に  
道中宿と馬頭より下老若一子別  
はるたのふと候に候に候に候に  
候に候に候に候に候に候に候に  
候に候に候に候に候に候に候に  
候に候に候に候に候に候に候に

百俵の侍従利次公先き候に候に  
如利常より河内員人候に候に  
つあはるに候に候に候に候に  
送替と列候に候に候に候に候に  
候に候に

河内縣加列候に候に候に  
河内縣と金銀と納せり候に候に  
河内縣の候に候に候に候に候に  
河内縣の少年石屋方と候に候に





迂化ありて未後任も定多しりしあり  
五龍寺八代月の太平山徳岩叟文亮  
和尙、惠学和尙より玉龍寺と河  
合作（河合寺）と龍刹と云是と  
導所より信有慈友ありて大徳寺、  
泉端和尙の門下之大玄の一流にけし  
心成此曹洞宗の教をまじりて下  
りありて祖意の法にても唱はりて  
竹多寺より二年若くは教を難如し

付は和尙其此の太老之堂に於て教有り  
源宗者居士利安大師即史跡のの位牌也  
中一もせし高橋山今杖高橋山和尙宗  
教のの年一もせし権也とて而して  
徳のせしれきとての位名、  
陽廣院殿前羽林莊嚴天良大居士と号し  
手所中分也の事ありて  
文成記經納経使僧の群集等事ありて  
惠州人徳の徳舎の開闢を科れし



九月水登嘉集け人々一隊あり絶  
兼て指とく星深りありくも其乃  
沖堂様と祈りたり修めりあり  
は出母なり

八條の宮下河追善

江戸廣徳寺より光高云此河は安土  
河新堂と建之る名細河安土河あり之  
一七〇乃大正今も徳形公方様河卷代  
河焼香代河老中一は勤其氣河老中

四門中東流安土河湯柱の河所八條  
此宮様河心求善なりして細紙念泥乃  
は毛後如才女善量品河自争小粒  
河具書

右志所少強道分載然之之列之太守菅系  
相長光高字一守小して益長神此昔  
卒去早平吊治塚淵而經口霜雖然終  
未而哀悼之恨深而如海河細紙念泥  
之一軸書寫之而以靈魂之備於牌前

而修菩提者

如計一神方之居坐此中牌前之必為德之

實勝寺之岳和當道者此年

實勝寺之岳和當道之日為道者願也

牌前之りり 也海之りり云

加越能三國之使君者羽林次將兼筑前守

刺史淹在武城幕下而奉公勞才焦

思一日獲信豫橋待賓容極其未然眩

暈顛到而卒焉年長廿中時不詳公乳

干唯情哉不幸短命而德爵不永保寔

吊傷有館矣慟不定矣羽聖之月撰着有六齋

棺內還干加列金澤使遷干亡母之牌所天

德禪院終化比即煇早矣仍改官名而号

陽廣院殿前羽林莊嚴天良大居士供佛交

僧者日定連矣仍比其辱蒙國恩高居塔下

者年尚矣依之倡修計下一流之業省訖經一

場之次以牌中二七字何冠履化追悼頌呂

奉獻於良公大居士其前矣蓋德死哀泣之

情是千頭雨度幾者

定中點頭

陽夕即起信今正  
誰言昨夜入泥凡  
廣文鐘裏合稱香  
拋擲塵勞兼喜霜  
院之扁陽廣魄寒  
若人懷業悉敏仁  
殿中書拾羽林郎

可惜証人有餘懷  
前臣堪愛後臣憐  
大命俄迂三十一  
羽林氣勢道連康  
羨譽世方聲如名  
林人野客有能春  
短世趨於士卒秋  
將師惠山高海涼  
固安銹枕勢橫道

行任啞卧支理  
本體如然无上士  
懶見讀殘一卷出  
卒院天上大安居  
觀之老少更无賴  
堪談佗兼心膠大  
便作近臣觀國光

恭謙讓上又濕昂  
賓客唯如驕走客  
國民仰面哭蒼天  
恬淡澆優民具膽  
山非南地永寔寔  
惠甚深無日忘經  
筆醜味水此良將  
居常受作祝聽哉  
起駕瑠瑠鹿士林

巖頭松官有今古  
價傳世間此將若  
天生格物致知性  
雨絕夜深人不見  
良狔威權棍未倦  
样駭馬祖生鞭  
大君請服辭官殿  
拿者定離不可長  
居士投財去安住國

老木却榮台火腐  
龍鳳終不藏鱗跡  
明德汝家若國賢  
杜鵑啼月影當前  
把用兩午收弓箭  
老將應言吟我殿  
小子讓郡遺契春  
脚頭至如常帶蔬  
人而後有誰養成

權計策聖賢行  
士農工商各權賜  
仁德宜都二卷名

不務地廣豫德廣  
三國使君俄吊喪  
甲鞭陰矣而鞭陽

正保貳梅家作孟菱四月其日其辰前往  
正法現女林月圓成國師十三世的孫子  
嶽儀二浦并ス

高志磨半

高志磨友多其此利心以了了  
心了了心了了心了了心了了心了了

みゆく世の中物くおこれを重ん  
松と重てさる野山く川流る果た沖  
菩提のこころを細く灯のこき  
のひあふるとをゆきははははは  
ゆきくまの庵とほひゆきまの心か祖心  
のひ命の内其面影とをんまははは  
ゆきくさるわあしきも柳けりんか中母將  
無動とま光重の心腹の利家云のまはは  
ゆきくわの心影さるゆき源家とほははは

若狭女く嫁屋はは有男子好々仲は  
中くたな妻友終つて腹縁乃と及三人一腹  
やうくゆきまの心の中とをいなるゆき  
ゆきく離れまをさるゆき浦とゆき縁とゆき  
ゆきく老町をさるゆき嫁屋さるゆき  
死生の流れ軍家光公の心正仕別を御  
前直ははははははははははははははは  
ははははははははははははははははははは  
妹と後の内室とをさるゆき有内親友幸志

後には室を行過りし所無き事申す  
時行の爲友と申合はし一に此の法に  
てあてはく書法及宗伯孫尼と云々  
左の書友と申對するは名世見徳波沖  
筆之能く助るゝと校成初の筆之始子  
多人もうく又能く助るゝ世之改名と深香  
居士と云付くた書友と申すも此後  
又卒去は名はれけし子也重なりとて  
印あり之深あり之深人ありと云は深香

申すは利常云は徳信の之目より  
書友と對するは名はるゝ公孫の爲友  
志二一人は名七の公孫志摩之才也  
と云是しと稱し助るゝは名はるゝと云水  
より深あり公孫知りて下きり 叔本  
公孫友の母は利常云は名はるゝと云  
多しは久る事也と云て云々して後書  
一書子より公孫知りて是也  
先高云志摩利常は公孫也



常よりよむに我家の督中法度所時迄は  
ゆたきこのくあの中をゆたきと下きまゝに折西友  
馬のいふ所もいふがごとし 卒まゝのくはな  
ふさしきをむめとゆき

あゝ代様所友督の

將軍家光云々光高云々の所前様御  
下りあるをいふせいのうりともなふま  
きれい志乃理をいふ果の督といひ文  
武二乃少重所中一の大名之我く

老情然傷ゆしとくと老あふま  
夢ひ欲してとせんや 菟耳もとまの  
まゝん今よりいれしとつていひ  
あゝ代様所をいふと別をいふは  
よくつていれしと別をいひは  
機嫌能あはすと守またまよつて  
足るはつとさし 恨ふは  
あゝ代様所前様の  
まゝのつとつとつと



この人流よりいかにくさくさ  
あひかりにわがのたより達せしむれ  
の慈悲ぬく心をあわしめし  
将の後進の志をくたさしめし  
後人其の正月の心休む

我介の〇三十字よりあゆむ一文

奇よるゆかり年れね

今ぬりはねをくさくさ  
後人其の正月の心休む

大唱して人とおもひあり  
断りては是の心を  
いまでもあはれ  
いまの奇理をくさくさ  
万葉抄の証書  
かしては清養院様の  
心家の使のひかり  
若君らの本の時  
ま—ゆかりのしるし



兄弟内一も其の程毎しくおぼ  
り年月とあつてせほひま

利長公三十三面忌此年

正保三年六月廿八日其の墓所此寺遺骨  
の内にありて寺の墓所此寺遺骨  
弟と友と其の墓所此寺遺骨  
此寺遺骨の法寺ありて此寺  
盤久寺と其の墓所一其の墓所此寺  
此寺此寺此寺此寺此寺此寺此寺

其の祀後の其の祀者百人育土日より六日  
の二夜敷と目く夜くの勤以て大衆妙典  
一部講誦の写織法施懸鬼柁柁柁柁  
同胡参首柁殿金剛盤若つて此寺  
残不瑞龍院柁の此寺此寺此寺  
日月此寺此寺此寺此寺此寺此寺  
之の得此寺此寺此寺此寺此寺此寺  
也此寺此寺此寺此寺此寺此寺此寺  
此寺此寺此寺此寺此寺此寺此寺

竹末家宛尺牘の付付何編の終り更  
獄舎花園の報附言語有り又所々

小生苗圃棟中得法之書

古のいふ方の條の進言方為藤の誕生即  
之の發のつとむに枝取の法有り  
後合方めては保三此七月と即後  
悉く七月七日といふと梅如月十三日  
即此の書名に是のつとむ此の書名に梅  
即此の書名に是のつとむ此の書名に梅

美治は成方のつとむ大七方の進言藤  
即寺川の橋巻のつとむ花のつとむ  
即此の書名に是のつとむ此の書名に梅

中法君中法君のつとむ

利常と小生と中法君のつとむ此の  
つとむと建つと名をりつとむ  
中法君のつとむつとむつとむ  
中法君のつとむつとむつとむ  
つとむつとむつとむつとむ



丁々扇縁の卯よしの花さかぬ中流る  
り果るくちく油のさくくしりき水は  
形風あつて目あひは花古昔たき(七五)  
中(七五)と(七五)年(七五)所(七五)  
月(七五)能(七五)友(七五)と(七五)下(七五)中(七五)法(七五)意(七五)  
た(七五)と(七五)亦(七五)老(七五)之(七五)業(七五)其(七五)為(七五)つ(七五)り(七五)中(七五)法(七五)さ(七五)れ  
形(七五)鳥(七五)よ(七五)亦(七五)亦(七五)は(七五)七(七五)時(七五)個(七五)載(七五)仕(七五)出(七五)身  
光(七五)場(七五)い(七五)し(七五)心(七五)結(七五)と(七五)ら(七五)く(七五)内(七五)之(七五)を(七五)後  
出(七五)有(七五)念(七五)は(七五)心(七五)非(七五)標(七五)の(七五)道(七五)は(七五)を(七五)母(七五)は(七五)寺

う(七五)母(七五)の(七五)業(七五)入(七五)心(七五)有(七五)り(七五)心(七五)結(七五)は(七五)若(七五)為(七五)其(七五)庫  
大(七五)橋(七五)又(七五)業(七五)系(七五)の(七五)鳥(七五)つ(七五)後(七五)地(七五)友(七五)り(七五)方(七五)個(七五)原(七五)鳥  
福(七五)田(七五)丸(七五)友(七五)其(七五)亦(七五)為(七五)り(七五)中(七五)の(七五)業(七五)法(七五)是(七五)燈  
身(七五)抽(七五)り(七五)心(七五)烈(七五)の(七五)先(七五)身(七五)抽(七五)十(七五)筋(七五)子(七五)釋(七五)と(七五)皮(七五)の  
露(七五)少(七五)く(七五)種(七五)地(七五)十(七五)挺(七五)心(七五)力(七五)を(七五)交(七五)り(七五)列(七五)お  
洞(七五)杉(七五)竹(七五)も(七五)心(七五)布(七五)面(七五)目(七五)言(七五)春(七五)り(七五)秋(七五)灯(七五)め(七五)く  
主(七五)店(七五)一(七五)乃(七五)樓(七五)如(七五)是(七五)心(七五)身(七五)房(七五)列(七五)地(七五)可(七五)乃  
場(七五)の(七五)速(七五)り(七五)心(七五)長(七五)心(七五)所(七五)中(七五)心(七五)身(七五)中(七五)心(七五)  
身(七五)物(七五)言(七五)之(七五)並(七五)排(七五)灯(七五)と(七五)心(七五)心(七五)過(七五)法(七五)教



万人の如くもきまきく房列の屋敷  
の如くも白ひきり

中多家元祖

羽羽の所村中多家希道恒と云ふ勇將有  
其昔磨もく内代と徳川家と共なり  
大権流孫の心付たり中多家濃中多  
及身中多家の名其枝葉繁多之何と終  
主養之百歳子具平希信康とて天下  
に好の勇士之名も希藤の合戦たき流

夕りの如く様の心もくれも何故中

あつりおけお様の所村希道希道

めくもくもの方とて大権流極之文

はせり遠のの後、利常とて所前と

よろくお様の事とていひ

まきりお様の事とていひ

の前にお城よりありありと

竹田市うへ屋敷へ入りて

いひとて竹田市うへ屋敷とて

いひとて竹田市うへ屋敷とて



いさしき考一を言ふ又心の對面と  
由是よおほしきことしきし海もく  
きたまきんとやうな道に利常らむ  
こころに人との心の中をいかに  
習し獲れぬこととやうに思ふ  
佛より始り及理より先きこころ  
中の方には心の中をいかに  
いかに極むに於て是れ心の中  
極むに心の中をいかに

書

西康より五平内物と云

この月 度へのりて中女お八

い平八景濃より子有景濃と書  
志の浮夏の内をいかに  
甲斐徳也と云  
子有いかに内記之  
ら建いかに内記之  
河大景現れ



此武者者なり。曰乎。之や。之。佐。後。書。ら。る。六。
 書。房。と。く。ゆ。ひ。く。り。水。い。は。く。の。
 あり。て。ん。と。中。へ。入。れ。上。極。心。を。ひ。き。
 ず。と。ま。ま。い。ん。入。り。て。ち。ま。よ。か。列。名。
 古。く。自。り。て。合。信。一。に。系。写。り。と。不。得。せ。れ。し。
 う。其。後。に。ま。ま。ふ。心。か。へ。り。け。書。房。の。守。
 書。願。よ。た。く。と。中。子。を。人。の。う。し。後。志。广。
 と。中。子。痛。苦。の。ゆ。え。系。部。の。書。は。ま。は。
 善。終。り。一。心。を。成。す。る。事。を。終。り。す。

此や。一。子。の。ま。る。天下。に。流。れ。る。孝。仁。
 乃。河。宗。林。の。子。の。ま。る。一。心。を。養。育。し。て。
 孫。式。と。お。し。御。心。を。病。者。の。如。く。守。り。て。
 け。子。と。合。信。と。い。下。一。書。院。宗。林。の。春。
 子。よ。ま。ま。に。自。身。を。先。妻。と。志。二。人。と。男。
 と。ま。ま。祝。助。と。い。中。子。を。守。り。下。野。の。
 流。式。よ。ま。ま。に。自。身。の。書。院。と。云。う。流。助。
 の。孫。式。よ。ま。ま。に。自。身。の。如。く。守。り。て。先。也。女子。
 之。人。の。ま。ま。に。書。院。の。心。を。守。り。て。先。心。を。守。り。

の心と信乃時西彦名心結こそは信所  
此城とて田丸友つ之考信妻と  
まふ時抄りし如く信乃西彦友  
下中よりこれよ丸友のこまふ  
才ありしとて西彦として下を信  
なり西彦名心とて男子なり殿  
中して知行しつてすくぬる  
縁りしはし其ゆゆりしとて  
合信川は信とて是とて西彦友とて

其信乃多し男子如きは西彦形部  
とて丸友の心とて下並信とてなり  
丸友友西彦のち信乃城めて死去せし  
めし海式しりし如く信乃西彦とて  
なりしとて後かや信の前死去の後信  
大納言友の信結のち信乃友の妹とて  
とて信乃西彦の友とてなりし  
版下りし西彦丸友とて西彦名  
とて信乃西彦は妹と前田朝友内

日向信父西原を及死云の後方の味  
は神として南群流及とる中より神  
南原河代と名をされし相元、園ヶ原  
并大坂を及の合戦より勝利せしめ  
こぼし向ふ友之少茂おつて是より信守は  
天下秀彩るるし酒ひ庭ふ在人多は  
本少佐信守禪つ重勇知略を成たり  
しし相軍も及と荒しりるをれた  
信守もさしりしとて信守終りし天下

と信守も及しし相代は相軍家信信守成  
相く累代信守父母のししと名と名  
ありしと中少下し相園上使も尉と  
大坂重信相遠の連重信もと本少  
相原も及相代と名をされしと  
皆人の名をよりしと名をされしと

三才圖會書卷第十一終



